

ミノア文字解読への過程と影響

村田 数之亮

【要約】 発見以來五〇余年にわたつて謎の文字とされてきたミノア文字が、ヴェントリスによつて——三種のうち線状文字Bのみであるが——解読されたことは、決して一人の学者の功に帰すべきではなく、多くの考古学者や言語学者の努力と成果からの当然の帰結ともいえる。すなわち、ウエニス、ブレーゲンまたフルマルタらの発掘、研究によつて従来の定説が脅かされて新説が提出されてきたが、一方コーバー、ベネットらによつて線状文字の性格が次々に明かにされ、Bはギリシア語を表わすことが実証され、また資料が十分に提供された時に、ヴェントリスの成功が可能になつたその過程を、たどつてみたのが本稿である。次にこの解読の結果はエーゲ文明の歴史に予想外に大なる変化をまねき、また多くの問題を提出した。たとえば、クレタの最盛期について、ピュロス王国について、さらにミューケナイ時代の社会や宗教、その他について多くの論文が発表されたので、それらを整理し私見を試みた。

一

エーゲ文明の研究は一九五二年にミカエル・ヴェントリス *Micrael Ventris* のミノア文字の解読(線状文字B) ^①をもつて、その方向を新航路の方向に決定的にしたといえる。この成功は二十世紀学界の、また最近二十年間にイギリスが世界に誇るべき三大業績の一つであつた。エーゲ文明ほど高度に達しました広範囲にわたる文明であり、しかも西洋

文明の母胎たるギリシア文明の直接の先進者といえる文明でありながら、その文字がかくも長らく未解読であつたことは、実に不可思議なことであつた。

エヴァンスらがミノア文字の記録を発見して以来、実に五十余年間、諸国の幾多の学者の努力にもかかわらず、解読の曙光さえ見出しえず、ついにはその解読は、ロセッタ・ストーンやベヒストゥムの碑文のごとき二種ないし三種の異なる言語を以て同一内容を記した材料が見付かるまで

は不可能であるとか、ミノア文字は謎であるとかいつた、絶望的な声さえあつた。もちろん幾度かは成功の報告が学界に伝えられたが、いづれも其後の検討にたええなかつたところが、ここに一九五二年、イギリスのミカエル・ヴェントリスが提出した解読の報告は、たしかに確実なものであり、彼の方法は今や学界においてほとんど疑いえないものと承認されるにいたつた。しかしこの成功はヴェントリスの卓絶した才能努力によることは勿論であるけれども、それは単に天才的な閃きによる許りでなく、それまでの諸学問の進歩の上に立つ当然の帰結でもあつたと思われる。

このことはヴェントリス自身も記しているところである。そこで本稿にてはこの解読の道がいかにして成功の頂きに達したかを跡づけてみたいと思う。

次にミノア文字の資料はほとんど泥板 (clay tablet) であるが——それ以外はごく少数の陶片に記された文字と印章——それらは品名目録のようなものなることは、早くから推定されていたから、たとえそれが解読されてもエーゲ文明の歴史や文化に根本的な変化はあるまいと思われていた。しかるに解読が進むにつれて、タブレットはたして品名

の記録、収支ノートの類であつたが、その内容の検討や推測は考古学的研究の結果と関連して、幾多の新事実を決定し、エーゲ文明についての根本的な変更が要請されてきた。エーゲ文明史の一部はたしかに書き換えねばならなくなつた。この解読はミノア文字というもその内の一種にすぎず、またその端緒であるにかかわらず、なおその影響は幾多の研究をうながしてきたので、その最近までの達成と成果について一晒しておかねばならないのである。以上の観点からして現在までに私が見得たかぎりの材料によつて筆をとつた次第である。そして解読そのものについては、川端真治、太田秀通両氏の紹介にゆづりたい。

① ヴェントリスの解読の決定的な公表は一九五三年 (Evidence for Greek Dialect in the Mycenaean Archives) JHS 83, p. 67, Antiquity (108, Dec. 1953) 一九五三年のこととして、*Zeitschrift für Assyriologie* (108, Dec. 1953) 一九五三年のこととして、個人で Experimental Mycenaean Vocabulary を配布し、放送もしているので、私は一応一九五二年としたが、しばらく資料の完備をまつことにした。

② 川端真治「ミノアン・スク립トの解読」(史林三七卷一五四年、四号、九〇頁以下)、太田秀通「ミケーネ文字の解読について」(史学雑誌六三編一九五四、一一号、四四頁以下)。

わが國にて最初にこの近づき難い解説を早くも紹介された労苦は甚だ多としなければならぬ。

③ 拙稿「エーゲ文明研究の近況について」(史林一九五四年一
号、六一頁以下)は近況と称えつつも、ヴェントリスの解説の
成果にまでいならず、新方向を多少認めつつも(六六頁)旧航
路上に止るものであるので、本稿はその補正であり、私の転換
である。

二

ミノア文字の解説はこれまでの言語学的研究の成果であ
るとはいえ、それはエーゲ世界における考古学的研究と言
語学的研究との二者——さらに加えるならば十分な資料が
一斉に公表されたこととの三者——の合流、交叉した瞬間
にまたその場所において、咲いた輝かしい花であつた。そ
れ故に、いまこの成功の過程をのべるにあたつて、この両
方面から考察してゆきたい。しかしその過程については幾
多の論稿があるし、^①また重要な文献にしても私が目を通し
えなかつたものもある。本稿は解説前後のそれに関する諸
研究を整理して研究を跡づけ——時には余りに安易簡單な
ほどに——また多少の意義づけをした解説である。よつて

あえて学界紹介としたい所以であるが、冗長になるのをお
それて本文では諸研究の大綱を主とし、具体的な内容の多
くを註にゆづつたから、より深い理解のためにはそれを参
照されたい。

まず私もクレタ・ミケナイ文明についてはほぼ次のこ
とき定説から出発しなければならない。^②(1)クノッソスがミ
ケナイに滅ぼされるのは、前一四〇〇年ごろであつて、
それまではクノッソス王が東地中海の海上権交易権を独占
していた。(2)その当時ミケナイ人の諸国はクレタ文明を
全面的に受容していたが、政治的にはクレタから独立であ
つた。(3)このギリシア本土では文字(ミノア文字)は極め
て稀にしか知られなかつた。(4)ミノア文字の線状文字Bは
クノッソスのLMⅡ時代のみの宮廷文字であり、(5)その言
語は線状文字Aや絵文字と同じく非ギリシア語であつた。
このようにクレタ文明とミケナイ文明との関係が設立さ
れ、したがつてミケナイ文明との間隙は可成り大きかつ
た。

この定説に対して訂正を提出したのは、ミケナイ陶器
——これまでは時代差も余り認めずに一括されていた——

の精密な研究からは、*Blegen-Wace, Pottery as Evidence for Trade and Colonization in the Aegean Bronze Age* (Klio. 32, 1939. 131 ff.) は、むしろ革命的な最初の論文であつた。この論文によると、クレタの盛時とされる

LM I—IIにおけるクレタ・ミケナイ陶器を東部地中海域について精査すると、それらにはクレタ製品のほかに、クレタ系ではあるが、ギリシア本土製のものと、またクレタでは知られない様式の本土製品とがある。このような本土製陶器は前一四〇〇年以前からしてシリア、パレスティナ、エジプトにおいては、量的にクレタ製品を凌いでいる。かくてギリシア本土とこれらレヴァント、エジプトとの交通はクレタを経ずにこの頃にはより盛んに行われていた。そののみならず、クノッソスの「宮殿式」陶器やエフュラ式杯 (Ephyraean Cup) はギリシア本土のクレタに対する反響^①の証である。

ミケナイ陶器によるこの結論はウェースとブレーゲンの説であるが、宮殿式陶器などが本土的であるとみたのは、すでに早く古典考古学者の鋭い様式分析から提唱されていたものであつた。すなわち、スニイデル (F. A. S. Snijder,

Kretische Kunst, 1936)^② は宮殿式陶器、エフュラ様式盃、クノッソスの玉座室の壁画、においてむしろ本土のクレタへの影響だとしていた。しかしこの説は詳論されたのではなく、注目されたが、一般の承認までには遠かつた。

ついで第二次世界大戦と戦後の時期になるが、この時期における「エーゲ文明研究の重要な特色はLH (LM) 以来すでにミケネ勢力がクレタを圧していたことの解明」^③にむかつて進んでいた。

その当初に現われた研究は戦争に中立を保つたスエーデンのフルマルクのミケナイ陶器に関する二著 (A. Furumark, *The Mycenaean Pottery. Analysis and Classification 1941. The Chronology of Mycenaean Pottery 1941*) によつた。彼はミケナイ式陶器の形態と装飾とを実に精密に分類し、その各々の形態や装飾の起源から発展をたどり、またミケナイ時代を十一期に細分したが、それはこの陶器の研究に初めて真の足場をあたえた劃期的なものであつた。それは形態においても文様においても編年とともに余りにも細く分類されているが、形態と文様をクレタ起源、MH起源、ミケナイの創造に区分して、本土要素を峻別して

今後の研究の基礎をおいた。地域差には触れていないが、たとえば、文様を例としても宮殿式についてはそのシンメトリーや諸要素の混在や文様帯による分割などに新精神を認め、また文様一般についてもLMⅡとⅢとの間に大なる差のないことを実証していた^⑥。

そしてLH(後期ヘラディック、すなわちLM)における東部地中海の勢力関係を明確大胆に——当時としては——素描したのが、カンター(H. J. Kantor, *The Aegean*

and the Orient in the Second Millennium B. C. 1947)であつた。彼女によると、早くもMMⅡの末以来、クレタの商権はオリエントでは重要な通商勢力ではなく、むしろミケナイ・ギリシアの商人や航海者が東西を結びつけ、LMの通商は全く彼らの手にあつた^⑦。この説をより実証的に動かし難いものにしたのが、フルマルクの後につづいたF. H. Stubbings (*Mycenaean Pottery from the Levant*, 1951)であつた。彼はロードス、キュプロス、シリア、パレステイナ、エジプト各地方のミケナイ陶器の研究からして、LMⅠ(ミケナイ時代二期)にはレヴァントとエジプトとの交易はクレタとの関係より強力になつてい

ことを証明した^⑧。

かくてマッツ A. Matz は教程本的な温健な立場においても(*Die Ägäis. Hdb. d. Archäologie. 4te Jief.* 1950)^⑨前一四〇〇年よりも前一五〇〇年を重要な劃期として、LM(LH)Ⅱのクレタ文化は衰頹期にあつたこと、宮殿式陶器、トリグリフ文様や、半ロゼット文などの建築的文様は従来の説のごとくにクレタで生れたものではなく、本土文化の侵入と認めねばならなかつた^⑩。

しかしこの間にあつて、これまでにほとんど主な遺跡は発掘されたと思われていたギリシア本土において、一九三九年に意外な発見がなされた。しかもそれはさきの新説の提唱者ブレーゲンによるものだつた。ホメロスの「船の目録」によるとトロイア戦争の時にアガメムノンのミケナイについて多数の船を提供したのは、ネストールのピュロスだつた——一〇〇隻に次いで九〇隻——。このピュロスは西メッセニア地方にあつたとしても、今まで確定されえなかつた^⑪。しかるにブレーゲンはクラシック時代のピュロスなるカコヴァトスの北方約六料の地点にあるアノ・エングリアノス *Ano Englianos* の丘に鋤をいれ、見事な宮

殿の一部に出あい、ブレーゲンはこれこそ「ネストールの宮殿」なることは確実だと発表した (AJA. 1939.)。ホメロスはまたもや実証されたわけである。しかしそれより重要な結果は、宮殿の南東部の細長い一室から文字を刻した多数のタブレット(泥板)をえたことだつた。総数六二二個あり、その文字はクレタの線状文字 B と多少の相異はあるが、同類であることは直ちに決定された。そして伴出する陶器よりして、これらのタブレットはこの宮殿が火災で壊滅する直前のもの、すなわち早くとも前十三世紀末のものでなければならぬ。ここにミュケナイ世界には文字は稀少であつたとの従来の説は、くつがえされた。そしてまたクノッソスは前一四〇〇年ごろに滅んでいるから、このピュロスのタブレットはクレタ人のものではなくてミュケナイ人の手になるものでなければならぬことになり、アイア人は文化の低いヴァイキングではなかつた。そしてブレーゲンはミュケナイやテイリスにタブレットが見えなかつたのは、単に運が悪かつただけであつたとして、そこでの発見を期待した。

この重大なピュロスの発見によつて、エーゲ文明の研究

はもはや後もどりしえない更新の一步を踏み出さざるをえなくなつた。しかしこのタブレットは発表されぬうちに第二次大戦がおこつて、空しくアテネ国立博物館の金庫に眠り、新資料による新しい展開は中絶された。しかし戦雲が収るや、ブレーゲンらは、一九五二年、五三年と相續いてアノ・エングリアノスの丘を發掘し、宮殿の主要部をあらわしたが、それはミュケナイの宮殿に匹敵する機構と規模をもち、ネストールの宮殿の姿が全く明かになつた。しかも此度もさきの書庫付近から四八四個の泥板が発見されたが(一九五二)、やはりそれにも線状文字 B が書かれていた。

一方、ウエースは一九五〇年からミュケナイで活動を開始し、「油商人の家」(House of Oil Merchant)、「酒商人の家」(House of Wine Merchant) 其他の家屋や墓地を發掘したが、五二年に彼もこの「油商人の家」から三十八個のタブレットをえたのだつた。この泥板は「ミュケナイにて発見された最初のものであり」——一九五〇年に一個表面採集されていたが——また宮殿ではなくて「私人の家にて発見された」最初のものであつた。ウエースの新説への確信はいよいよ固くなつた。

ブレーゲンと並んで古いエーゲ文明觀の更新者の先頭をきつていたこのウェースは、己に以前にも大胆な見解を発表していたが、ミュケナイにおけるタブレットの発見の前に次のような見解を提出していた (The History of Greece in Third and Second millennium B. C. Historia II, 1953, Heft 1 執筆は一九五一年と後記してある)。後期青銅器時代(LM)となると、メロス島、ミレトス、ロードスにおいても本土陶器がクレタ製品を圧倒している。さらに今やピュロス・タブレットの発見と研究とは新しい光を投げた。このタブレットをはじめ本土のインスタクリプシヨンの文字は線状文字Bであるが、これらはクレタ語とは異つた言語を表わしていると考えられる理由がある——後述コーバーの研究参照——筆者——この本土の文字と思われるBを記したタブレットが何故にクノッソスに多いのか。今や「宮殿式」陶器、アラバストロン、エフユラ様式杯、トロス(穹窿蓋)などは本土に起源をもつことが認められたのであるから、クレタが本土を支配していたとの説は捨てらるべきである。LM IIには少くとも本土が、恐らくは本土の王朝が、クノッソスあるいはクレタを支配していたと

推測されるにいたつた。LM IIのクノッソスは本土の支配者の治下に繁栄したのであろうか。この見解はホメロスにおけるアガメノンとクレタ王イドメネウスとの關係(ミュケナイ王に從屬的關係にあるクレタ王)を説明するであろう。まだこの見解は sub indice にはあるが、われわれは虚心にそれに対しなければならぬ。このように明確に新しい立場に立つウェースが、前述のようにミュケナイでもついにタブレットを発見したのであつた。

以上概述したように、この節の初頭にかかげた定説のうち(1)(3)(4)は必ずしも認めがたく、また(2)(5)も疑問になつてきた。そして代つてウェース、ブレーゲンの説が確實性を増してきた。この謎の文字の解読者なる言語研究者としてのヴェントリスはこのような考古学者たちの成果を是認してそれに依拠する者であつた。しかしながら言語そのものが未解読にして、単に考古学的研究のみからでは、最後のな決定は下しがたく、従来の説は動揺しても壊滅しえない。然らば、言語研究者としてのヴェントリスは言語学研究において何処の地点まで先蹤者たちによつて導かれていたのであろうか。

- ① S. Dow, *Minoan Writing* AJA 1954, 776. は考古学、言語学両方面からミノア文字解読の経過を年代的にのべた最もよき論文であり、その一部は太田氏論文に引用してある。また R. D. Barnett が *Manchester Guardian* Sept. 30 に解読の歴史を記すというが、入手しえなかつた。なお簡単にはヴェントリス・チヤドウィックの論文にもふれてゐる (JHS 1959, 84; *Antiquity* 196, Dec. 1958, p. 196 f.)。
- ② エヴァンスやマッケンヂーの如くに、ミケナイ諸國はクレタ勢力の本土への進出だとも見る見解は例外であつた。拙著、エーゲ文明の研究、二八頁参照。
- ③ この論文は初期、中期ハラディック時代についても論じたもの。
- ④ P. 123, 154. 又た Pendlebury, *Archaeology of Crete* 229 参照。
- ⑤ 拙稿「エーゲ文明研究の近況について」(史林一九五四年一七四頁)
- ⑥ *Mycenaean Pottery*, p. 166 f.
- ⑦ カンターの書は書名のごとくより広い時期にわたるが、ことに一〇三頁以下。
- ⑧ 彼は進んで、当時のクノッソスはアカイア人治下にあつたとの説を *Paper of Hellenic Society*, 7, 11, 1952. に掲げたところ、ヴェントリスが記してゐる (JHS 1953, p. 84) が、私は未見。
- ⑨ 本書については拙稿「エーゲ文明研究の近況について」参照。
- ⑩ 本書は当時の標準的な中正なエーゲ文明史であつたが、四年後にはヴェニスにより「パツツの独逸語による概要は時代遅れであり、注意して使用されねばならぬ」と記されねばならなかつたことは、興味深い。もつともヴェニスには後述するように、最も先端をいつた開拓者ではあつたが。
- ⑪ すでにストラボンの時から不明であつて、デルフ・フェルトはカコヴァトス *Kakovatos* とした。この附近にはトロス(穹窿墓)や宮殿式陶器が発見されてゐたから。しかしそれ以上のことはなく、このピュロスは、すなわちネストール王国はホメロスの詩に止つて、ミケネ時代の遺蹟は確認されていなかつた。
- ⑫ この発掘事業は米・希両学界の共同であり、ギリシア國立博物館長クルニオテイス *Koumniotis* とアメリカのシンシナティ大学教授ブレーゲン(トロイアの発掘者)とが主導者であつたが、クルニオテイスは三つの穹窿墓の発掘に主力をそそいで多くの貴金属製品をえ、アメリカ人達が宮殿の発掘をした。
- ⑬ Excavation at Pylos, AJA 1939 (3-57-70)
- ⑭ M. Nilsson, *Homer and Mycenae* 1929. の説は定説だつた。
- ⑮ キリシヤ側からはマリナトス S. Marinatos が参加したが、宮殿はやはりブレーゲンらが発掘した。
- ⑯ Palace of Nestor. Excavation at Pylos. 1952, AJA 1953, 59f. Excavations at Pylos. 1953, AJA 1954, 127 f. マテナヤヤとほとんど同じ大きさ (12.9 × 11.2 m.) の主室を *メウマガロン* Room of State をはじめ幾外の部屋があり、それらは上階があり、多くの部屋に壁画、床の裝飾があつた。しかし城壁は未だ発見されない。また一つの穹窿墓。四節註⑩参照。
- ⑰ *Mycenae* 1950, JHS, 1951, 254 f. *Mycenae* 1951 (by Cook)

JHS 1952, 98 f. Mycenae 1952, JHS 1953, 130 f.

⑱ JHS, 1954, p. 131. New Light on Homer: Excavations at Mycenae, 1952 (Archaeology, Summer, 1953) Discovery of Inscribed Tablet at Mycenae (Antiquity 1953, June) 「油商人の家」も「酒商人の家」もミケナエの城塞外にあつた。

⑲ The Prehistoric Exploration of the Greek Mainland, Bulletin de Correspondance Hellénique 1946 p. 320 fb. (未見)

⑳ この論文は新石器時代から初期、中期、後期の青銅時代(それぞれに E H, M H, L H にあたる) 及鉄器時代についての大観であるが、しかも筆者の考古学者としての体験——陶器研究を基礎をおくこと——よりして、各時期について革新的な見解を表明している。その一つとして、ドイツの学者に多い初期ヘラディックやディミニ文化(新石器)に北方の影響を認めんとする説(「ギリシアのインドゲルマン化」に対し——拙稿、史林、六六頁——徹底的に反対し排斥している(本論文、七九頁(頁)))

㉑ *ibid.*, 87 f.

三

ミノア文字を記したタブレットは既にクノッソスにおける発掘のごく初期に二千数百個が発見され、其他でもハギア・トリアダを初めとしてクレタ諸地から出土し、またギリシア本土における数個の陶片や印章にも文字が認められ

ていた。その文字には絵文字 Hieroglyph、線状文字 A、Linear Script A おなじく B の三種類があることは、^①早くから承認されていた。エヴァンスは早くも一九〇九年に「ミノア文字」第一巻 Scripta Minoa I を公刊して、三種の文字を明確に区別し、相互の関係にも及んでいる。また絵文字とエジプト文字との形の類似を示し、数詞を明かにし、線状文字 B については人名や財産的な記録ならんことを推定し、東地中海域の線状文字と比較している。その後、幾多の研究が公にされたが、三十年代の末までに研究が到達したところはエヴァンス (Palace of Minos IV 1935, pp. 666-856) やスンドワール Sundwall の研究が到達点であつた。^②

それらについて一般に承認された原則は、(1) A (線状文字 A、および B は以後 A、B と略す) と B は異なる文字ではあるが、共通のプロトタイプ、あるいは A より B が発達したこと、(2) A と B とは同一言語を表わし、共に非ギリシア語なること、(3) B は L M II にクノッソスにおいてのみ使用された宮廷用、官用の文字なること(前述)であつた。そしてエヴァンスによると、A には八五サイン signs (記号)、

Bのサインは七三(シラビックに常用されるのはそのうち六二)——スンドワールによるとAのサインは七六、Bは六四、共通のもの四八——ある。数詞のほかに分数も判読され、十進法が使用されていたことはすでに明かであつたが、研究はサインの比較や種類や変形をたどつたり、著しいタブレットを解説したり、人名を表わすであろうサイン群を抽出していた。進んではA、Bともにイデオグラムがあること——その若干についての形態と意味との研究——フォネティック的な使用(シラビック)があることが推測されている程度であつた。またタブレットにはいづれもイデオグラムと数詞とが列記してあることなどから、ほとんどすべてが物品の目録と推定しうること、イデオグラムはタブレットの内容を推測する手掛りであること、一語一語(数個のサインよりなる)は短い縦線で判然と分かち、決して二行にわたらぬこと、などが単なるサインの分類から、進んで解読への足掛りとなるものであつた。かくて研究はまだ解読への準備段階をめぐつていた。

この時、ユーバー A. Kober^④の研究は、この謎の言語の本質の一部をようやく明らかにした重要なものであつた。

彼女は語尾にしばしば繰返されているサインあるいはサイン・グループ(記号群)に着目して、それは名詞の格(ḫe)を示すものとして、三つの格を定め、またそれにはA式とB式とあることを発表した(Evidence of Inflection in the Chariot Tablet from Knossos. AJA 1945, 143 f. Inflection in Linear Class B. I-Declension. AJA 1946, 268f.)。やうに数年後には、動詞の語尾変化^⑤と名詞の性(男女のみ)をも証明した(Minoan Script, Fact and Theory. AJA 1449, p. 81 f.)。そして次のとき重大な結論を導きだした。線状文字AとBにおいて共通のサインは六九、特有のものはAに六八個、Bに七二個であり、共通のサインといえどもその用法は互に異つてゐる。ことに数個のサインからなるサイン・グループを比べると、A、Bに共通のものは極めて少い——以上は既に他の学者が発表したものであるが、サインからサイン・グループを重要視する研究へ移つたことに、進歩と成果とがあつたのである——のみならず、上述の動詞、名詞の語尾変化はBについてのみである。かくてAとBとに表わされている言語は同一のものではありえない。「現在における唯一の安全な道はこのA、Bの文字

は各々相異なる言語を記すとの仮定を進むことである」と。^⑧
これは定説に対する根本的な変更であつた。

コーバーのこの見解は、その翌年ベネットによつてさらに確認され、進展した (E. I. Bennett, *Fractional Quantity in Minoan Bookkeeping*, AJA 1950, p. 204 f.)。彼の論文は重量、液体、固体の計量の単位をしらべ、それらの単位以下の量、すなわち分数の表示を研究したものであるが、それによるとAとBとは分数の表し方が、したがつて計量方法が異なる。前者ではエジプト系が用いられ、後者はメンポタミア系であることが判明する。^⑨このことから彼は次のような推論を取立てした。この計量方法の相異は単に表記法のみならず、觀念^{コンセプション}の違ひである。このBにおける新システム^⑩の採用は、新しく生れた別な地域との経済依存関係によるものである。そしてBがクノッソスの他に本土のピュロス、テバイ、ティリンスでも使われていたとすれば、^⑪——前節でのべたピュロスのタブレットの発見はコーバーの論文の時にはまだBと決定しがたく、彼女はそれを利用してしえなかつた——これはクノッソスがBの時代には本土との経済体系中に入つたのであると主張することができた。^⑫

なおベネットはも一つの大きな功績をあげている。それ

は 'The Pylos Tablets; A Preliminary Transcription (1951) と A Minoan Linear B Index (1953) の出版である。前者はピュロス・タブレットの最初のしかも科学的に整理され、正確に写されたものであり、後者はピュロス・タブレットの他にクノッソス出土のものをも総括整理したBのタブレットの集成であつた。彼によつてタブレット分類はようやく科学的になり、サインの順序が定められ、資料の整備はここに成つたといえる。この間にあつてエヴァンスの *Scripta Minoa II* (1952) によつてクノッソスのタブレット一七二二個がはじめて公表された。エヴァンスの死後に出版されたこの書はむしろマイヤーズ J. L. Myres の労作といわれるほどに彼の多くの手をまつたものであつて、人名、接尾語、接頭語を抽出し、単語集をもつけているが、直接的に、解説についての著しい見解はほとんど見られなかつた。^⑬なおミケナイのタブレットは既に発表されていたし、他の陶片も知られていた。かくて一九五二年にはBに関する資料はすべて公表され、またベネットらによつて整理されていたのである。解説の時機は正に熟したといわ

ねばならない。

しかも前述したごとくにAとBとは異なる言語を表わし、さらにBの言語はギリシア語であろうとの推定が立つから、そこに解読の鍵はえられたようにみえる。ここにエジプト文字や楔形文字の解読の場合と同様に、ミノア文字Bの解読のためにも、既知のギリシア語が鍵らしく思えた。オリエントの場合のごとくに同一内容を二種ないし三種の異なる文字や言語で記した手掛りはなくとも、いまやそれと同じ作用をする手掛りが見出されたのである。Bはギリシア語を表わすと推定して研究した学者は以前にもあつたが、彼らは資料不足のために成功しなかつた。機が到らなかつたのであつた。^⑩

わたくしは今までヴェントリスの解読までの道を——要点についての諸研究のみをとりあげて多少単純化しすぎたとしても——たどつてきた。つぎにヴェントリスはいかにして解読しえたか。

彼は一九五二年に従来のエトルスキ語としての立場からギリシア語説に移り、たちまちに成果をえたのであつたが、^⑪ 解読方法については彼とその共力者チャドウィック John

Chadwick との共同になる劃期的論文 Evidence for Greek Dialect in the Mycenaean Archives (JHS 1953, pp. 84-103) とはじめ、それを簡易にしたやはり共同執筆の Greek Record in the Minoan Script (Antiquity 108, Dec. 1953, pp. 196-200) またヴェントリスのみの筆になる King Nestor's Four-Handled Cups-Greek Inventories in the Minoan Script (Archaeology 7-1, March, 1954, pp. 15-21) にくわしく、それらによつた川端、太田兩氏の論文に明晰にのべてあるから、ここに繰返すまでもない。^⑫ としてヴェントリスらは八八個のサインのうち六八個の発音を定め、また二つの性、三つの格、単複数、動詞変化(「持つ」)のみならず、Active Participle, Medio-passive Participle, Indicative Forms についての規則をも見出し、多くの例をもつて示した。ことに JHS の論文は最も凝結した標準書である。そして彼らはこの言語をもつて“Old Achaean” としたのであつた。^⑬

なおフルマルクの論文 Ägäische Texte in Griechischer Sprache (Byzanos 51, 1953, S. 103 f.) はBの言語の性質を総括した点において、またこの言語の生成に関する卓見に

おいて重要なものといわねばならない。彼は簡単な解読前史の後に、サインの発音上の注意、綴字法の特徴、イデオグラムの分類、タブレットの種類とその内容についてのべるが、¹⁰⁾それらはこの言語の理解に端的に役立つ。なおこの論文の初めにおいて各ミノア文字の時期を次のようにみていることは注目される。絵文字は線状文字Aが使用された後にもMMIIIまで使われ、Aはそれから前一六〇〇年代の初期におこつて、前一四七五年の直前(ファイストスやヘア・トリアドの破壊の年であり、ここから発見されているから)まで用いられた。BはAの変化 Modification であつて、前一六〇〇年頃ギリシア本土で、すなわちクレタ文化の影響が急激に強化されたミケナイの堅穴墓王朝時代に作られ、この本土から前一五〇〇年頃のギリシア人のクレタ侵略とともにこの島にもたらされたのであつた。そしてキュプロス||ミノア文字はBと関係のあるものではなく、Bの成立以前にAより生れ、前一六〇〇年代にキュプロスに移され、エテオクレタ語を書いたと。¹¹⁾これらの見解にはなお実証を欠く点もあるけれども、おそらく正当な推定として注目留意しておかねばならない。

さて、線状文字Bの解読は以上のごとくに成功した。もはや今日では何人もヴェントリスの成功を疑う者はない。しかしそれは完成ではなく、未だ多くの困難と問題とが横たわつてゐる。その困難の最も根源的なのは次のことである。タブレットの性質上、それは一時的な仮の記録であるから、タブレットの殆んどすべてが壊されて不完全であり、従つて言語には省略形が多い。次にサインの発音を定め読みえても、そのギリシア語はわれわれのギリシア語よりも六、七百年以上も以前のものだから、その間に消滅して後に伝らぬ語である場合には、われわれはそれを解しえない。¹²⁾しかもその発音もまだ十分でなくて議論のあるものもあり、今日においても二十余のサインの発音が定つていないようである。¹³⁾また綴字法からして *ko, kos, kor, gon, choi* の何れなるかが容易には判定しがたい。¹⁴⁾

しかしともあれ解読は正しい道を進んでいる。近くヴェントリスの大部な研究 *Documents in mycenaean Greek* が出版されると聞く。世界の学界はそれを待望している。材料においても、一九五三年以後も、ウェースが予想したごとくに人々が注意さえすれば、またB文字の記録が発見

されたのだ。ミケナイにおいて一九五三年にはBを刻した印章が発見されて、文字の普及範囲の広さが証明されたが、五四年にはまた一〇個のタブレットが発見された。われわれはさらに期待してよいであろう。

- ① 現在はこれら三種の他にキエプロスミノア文字を加えて四種とする。Kober, *Minoan Script*. AJA 1948, p.100f. *Furnmarks, Aegäische Texte in gr. Sprache*, Eranos 1953, S. 105f. なおホルトはキエプロスミノア文字は線状文字Aより分かれたものとする。

- ② キエプロスは既に *Scripta Minoa I* (1909) と *Palace of Minos I* (1921) のみ三種を別けてする。なお同時代のより著とせられた *Sundwall, Kretische Schrift (Eibert Reallexikon der Vorgeschichte, 1926, 7 Bd. 95)* 彼の計量方法についての研究は特に注目される。又 G. E. Mylans, *Prehistoric Greek Scripts*, *Archaeology* 1948, p. 210 f. 参照。

- ③ キエプロスは名詞変化があるであろうか記してはるるが (*Palace of Minos IV*, p. 715) 、「ただ推測したのみで証明も詳言せなす。

- ④ コーバーの生涯の業績については詳かに Dow, *ibid.*, 83 f.
 ⑤ コーバーが示した動詞の語尾の変化は、川端論文第三表。なお同論文の他の表も参照。コーバーが動詞を見定めたのは、それは通例文の終末にあること、時称や数などの種々の変化をうけるから名詞より長いことなどからであつた。

- ⑥ このサイン・グループの比較研究はすでに (C. D. Kristopulos, *Some Remarks on the Minoan Language* など) 行われて多大な成果を示していたのを、コーバーが利用したのであつて、それによるとAでは約七〇〇種グループ、後では四〇〇種グループが見られるのに対し、共通のものは精々一五のみ (Kober, *ibid.*, 101.)。

- ⑦ Kober, *ibid.*, 102. なおこの論文は題目のごとくに「ミノア文字のタイプ、線状文字AとB、キエプロスミノア文字にわたるものである。なお彼女はAとBとにおける「総計」を表わす語の相異に着目して、それも両言語の差を示す有力な証拠とした。その詳しい論証は「Total」 in *Minoan Linear Class B* (AO 17, 1949) であるが、入手しえなかつた。

- ⑧ 単位下の計量にあつて、たとえばエジプトでは $\frac{1}{20}$ 、その残りは $\frac{1}{4}$ 、その残りは $\frac{1}{8}$ 、……、 $\frac{1}{20}$ となるのに対し、メソポタミアでは単位下は $\frac{1}{10}$ 、次は $\frac{1}{60}$ を使う。それで表記の場合、たとえば、エジプトでは $6 \cdot 4 \cdot \frac{1}{5}$ は $6 \cdot \frac{1}{2} \cdot \frac{6}{20}$ となり、メソポタミアでは $6 \cdot 8 \cdot 10$ となる。実例は太田論文、五四頁。Varis, *Arch.* 1954, p.21.

- ⑨ テバイ、オルコメノス、エレウシス、ティリンスから陶片にBを記したものが、以前に発見されていた。

- ⑩ コーバーはキエプロス・タブレットは「写真で七個を見たのみなので、Bと似ていても、それが二世紀以前のクノッソスの文字と同一か、否かはなお調査にまつ」と記している (*ibid.* 99.)
 ⑪ Bennett, *ibid.*, 221. またA、Bにおけるイデオグラムの差に

も着目してゐる。

⑫ その写字 (Transcription) については、ことにヴェネットによつて多くの誤が指摘をせらるゝ。たゞそれは Dow, *ibid.*, 98 f.

⑬ Ventris-Chadwick, JHS 1953, p. 89.

⑭ これまづの次に以外に、Vladimir Georgiev の諸論文 (Problems de la Langue Minoenne. そのレキメは仏文であり、批評紹介は Gnomon 26, 1954, S. 67. 及び C. D. Kristopoulos の諸研究は間接的にはヴェントリスに役立っている。これら諸論文については Dow, *ibid.*, p. 97 f.

⑮ Dow, *ibid.*, 82.

⑯ 解説の方法については太田氏論文、四八頁以下に明瞭であるが、サインの頻度によつてアルファベットにあてはめることは、暗号の解説と同様であり、当然のことであるが、またサインを「グリッド」(syllabic grid) に定めたことに成功の基本があつたと見えよう。

⑰ Ventris-Chadwick, *ibid.*, JHS, 1953, p. 103.

⑱ 続篇が「エラノス」の次の巻にあるのであるが、入手できず、そのためにフルマルクの論文の前半の紹介に止ることを残念に思う。

⑲ 彼によつてBの言語の性質を簡単に記すと——かような言語学的事項は私の能力をこえるから——発音上の特色として aspirate (帯気音) と非マスベラトの別、また tenes (無声破裂音) ~medial (有声破裂音) との別はなく、エとーの差もなく。Labiovelar には種々ある。綴字法については、すべてのシラ

ブルは通例一つのサインで表わされ、次のシラブルの母音をふくむサインで表わす、すなわち語尾は母音で終り、liquid (流音) nasale (鼻音) sibilant (鋸音) は他の子音の前や語尾には表わされず、sやディガンマは語首にこず、rのある二重母音の第二の分節は必ず記されるが、iのある二重母音にてはiを落す。ただ例外として a i を示すサインが語頭にある場合は残る。イデオグラムは象形的なもの——それには形式化のものと写実的なものがあり——発音的に使われているもの、発音からの連辞 (Tablurea) によるものとに分けられる。タブレットの形態には細長いものと縦長のもの(ヴェネットなどのいう“palm-tablet”, “page tablet”)とを区別せよ。

なおこの論文でも各サインの発音を表示しているが(Abb. 4) ヴェントリスの六八サインに対し七二サインの発音を定め——そのうちに?が九つあるが——また一サインについてはヴェントリスと異なる発音をつけてゐる。

⑳ Furumark, *ibid.*, S. 107, Abb. 2.

㉑ おそらく年毎にまとめて年末には他のものに記載して、タブレットは破壊してためたのである。一括したタブレットが箱に収められたまま出土した例もある。それ故に残存したタブレットは諸宮殿や家屋が破壊される直前のもの、その年内のものとして推定され、クノッソスのタブレットは前一四〇〇年頃、ミケナイのものは一二二五年頃、ピュロスのは一二〇〇年頃のものとしてされる。またタブレットから記載したものは皮、パピロスなどが推測され、それに關係してペンとインクの有無も問題とさ

れているが、多分あつたであらう。

②② 道具類の名称、職業などに十分その実例があげられる。

②③ 註⑩参照。ヴェントリスとフルマルクの差。しかしヴェントリスの JHS 1953. と *Antiquity* 1953. の値かの相異は、後者の論文がやや時間的におくれているから、その方がより確定したからだと考えられる。

②④ ロンドンにあつてヴェントリスの研究に注目していたエーレンベルクの一九五五年の論文でも、「なお約二十のサインが不明だ」と記されてある (V. Ehrenberg, 後出の論文、三頁)。一九五四年にチャドウィック (The Earliest Greeks, Manchester Guardian, June 1954) は B には少くとも八九サインがあり (他の説より一個多い)、そのうち約七〇が発音されたと。

②⑤ 太田論文、五一頁以下。Vantis-Chadwick, JHS 1953, p. 30.

②⑥ 城外の「スフィンクスの家」からも発見されたから、さきの「油商人の家」「酒商人の家」とともにミケナイ城外にある。三私人の家屋でも文字が使用されていたことが証明された。(Wace, JHS 1954, p. 171.)

②⑦ 同じく「スフィンクスの家」にて発見。(Wace, JHS 1955, Supl., 26 f.)

四

線状文字 B の解説によつてエーゲ文明の歴史はいかに変革を求められたか。この解説はまだ出発したばかりであつ

て、「唯今ではまだ言語学者の領域である」から、その結果が、歴史的な設定にもたらされるには早すぎるといわれる。①④ ①としてこの新しい資料の解釈によるエーゲ文明の新しい頁や節は年毎にまだ動揺し、時には行過ぎもあるであらう。しかしそれにもかかわらず、この将来の多少の変更を予想しつつも、書き換えられるべき姿の外廓だけはここに触れておかねばならない。今日われわれはこの変貌を無視しえないからである。それでここに私は目を通しえた限りの重要な諸論文により、それらを一応整理して将来にそなえておきたい。それは、前々節でのべたようにすでに一部の考古学者たちによつて推論されていた新しいエーゲ世界の姿が、いま解説によつて確証されたばかりではなく、それ以上のものがあつたからである。

何処から発見されたタブレットも解説以前早くから推測されていたように、それらには歴史、文学、法規はなく、物品目録、受取証、支出証、供儀のリスト、奴隸や工人の人員、土地と財産のリストの類であつた。その大部分は宮廷の財政に関するものであつたが、それにもかかわらず、それらは宮廷のみか、当時一般の経済、社会、宗教にも大き

な光を投げかけた。おそらく社会史家、経済史家は前十四世紀から十二世紀については、前七・六世紀のアテナイについてよりもよりよく解明するであろうと、まて言いうるにいたつた。そしてすでにこの解説による新しいエーゲ文明の要点については最近のエーレンベルクの論文 Victor Ehrenberg, Griechische Urkunden des zweiten Jahrtausends v. Chr. (Historische Zeitschrift 180-1, 1955, S. 1-13.)をはじめとして幾多の総括的な好論文がみられる。以下の記述はそれらを参照しつつ、またそれら以外の特種な若干の論稿にもふれた概述である。

まづクレタ側についていうならば、LM IIにおいてクノッスがギリシア人の支配下にあつたことは、疑えなくなつた。クレタ人が、より文化の低い他民族の言語を採用するはずはないからである。かくてこの時期にあたる宮殿式陶器、アラバストロン、エフェラ様式杯、玉座室の壁画、半ロゼットやトリグイフ文などの建築から採つた文様、穹窿墓などをクレタ人ではなくギリシア人の創造とする説が、重大な動かしがたい基盤をえたといえる。よつて今やこれらの考古学的遺物をこの新しい立場から厳密に様式分析し

て、このクレタに咲いたミュケナイ美術の精華の特質を解釈することが、古典考古学者に課せられている。ともかく、以上の結果として、すでにLM IIをもつてもはやクレタ文化の盛期とせず、形式化した衰頹期とまでは認めていた教科書的な見解さえも、斥けられ、進んでここに文化担当民族の交代を確認しなければならなくなつた。したがつてエーゲ文明の歴史においては前一四〇〇年ではなく、前一五〇〇年こそ最も重要な劃期——ペンドルベリーの如くLM IIを前一四五〇年よりとするとしても——となつたのである。そしてこの足場からして、クレタ文化からミュケナイ文化への推移が全面的に再検討されることが、すなわちエーゲ世界の新しい歴史が書かれることが要請されている。しかしながら、なおニルソンのごときは、ギリシア人のクノッス支配を「少くともLM IIの後半」にしか認めようとしていない^④。その理由は、私考するに、発見されるタブレットはすべて宮殿や家屋の破壊直前の年のものであるから、線状文字Bを記したクノッスのタブレットはLM IIの末のものであり、したがつてLM IIの初め(前一五〇〇年頃)に遡つてギリシア語が行われたとの証拠とするの

をためらうからであらう。この点については、ニルソンの躊躇も当然と思われよう。しかしながらLMⅡの期間中にクノッソスの支配民族の交代を表わすような考古学的痕跡が認めがたいこと、また前述した陶器や壁画などにおける様式変化はLMⅡの当初から認められることなどより、私にはやはりLMⅡの初めに変換点をおきたいのである。

ともかくもLMⅡにギリシア人がクノッソスに君臨していたとすれば、伝えられてきたクレタないしミノス王の「海上支配」(Thalassokratia)は、どうなるであらうか。今日までのところ——あるいは私が見た論文に限っては——クノッソスのタブレットにはクレタ島以外の地名は見付からないという。また前述したようにミケナイ陶器の研究からはLMⅡにおいてクレタ式陶器は小アジア、レヴァント、エジプトから後退減少している。かくて、クレタは元来農業国であつて、その海上支配とはアテナイの海上帝国の反映、すなわちヘロドトス、ツキュディデスらの創作であつて実際には存在しなかつた、との説があらわれつつある(Starr, *Myth of Minoan Thalassocracy*, *Historia*, III, 1955, S. 282f.)。しかしこの論証には飛躍があり、L

MIにおいてクレタの海上支配を認めるべきであると、私考している。

クノッソスはギリシア人が支配していたとしても、彼らはクレタ島全体を治下にもつていたか。この当然肯定されるような問題が容易ではない。成程クノッソスのタブレットにはファイスト、キニドニア(Kydonia 西部)、リニクトス(Lytos リュットス Lyktos 島の中部)、ラト、イタノス(Iato, Iunos, 二者は東部)などの地名がみられるから、クノッソスの全島統一を承認してもよい。しかし線状文字Aがなお他の地点で使われていること、且てからLMⅡはただクノッソスにおいてのみ認められ(たとえば Pendlebury, *Archaeology of Crete*)他の地方においては自然主義的な写実風の文様あるすぐれた陶器のみが作られていること、すなわち文化上ではクノッソスと他の地域とのあいだに判然たる相異があることなどからして、ギリシア人の全島支配は不明だとして留保する説もある。私はこのことの決定には、遺物のより精確な再検討を必要とする^⑧と考えるが、少くとも間接の支配は認めてよいと思う。そしてこれらの旧文化の存続からして、侵入したギリシア人

は強力ではあつたが、その数は余り多数でなかつたのであるまいか。

しかしこの侵入は新しい戦術の成功であつたとウェブスター (T. B. I. Webster, *Homer and Mycenaean Tablet. Antiquity*, 113, 1955.) は述べている。クノッソスのタブレットには三〇〇の戦車 (チャリオット) が記してあるが——ホメロスでは戦車戦闘は一回しか記されていない——それは丁度この頃のヒッタイトに見られるような戦車集団の攻撃によつてギリシア人はクレタ軍を撃滅したのであつた、というのである。

ともかく、クレタの盛時はLM Iをもつて終り、LM IIにはクレタ島、エーゲ海の島々、小アジア海岸、キエプロス、シリア、その南方海岸はギリシア人の海上権、交易圈内にあつた。この時期はミュケナイ人の海上支配の成立期であり、*Akwijade* の語 (ヒッタイトの *アッヒヤヴァ*、すなわちアカイア人とされる語に通じる) がすてにクノッソスのタブレットに見出される。しかし西方——「クレタの海上支配」下にあつたというシシリア島——がこの場合いかにあつたかは不明である。ピュロスの位置を考えれば、

西方へのギリシア人の進出は十分に想像されるけれども、タブレットにこのシシリア島の地名の有無については、まだ聞かない。しかしより重要なことは、当時におけるギリシア本土との関係である。前述したように考古学者はホメロスからして、明確な従属関係を指示しているけれども、タブレットからは何ら得るところがない。現在ではブレメンの説は一つの可能性として留意しておくべき段階であろう。

次に解説がミュケナイ時代、ギリシア本土の歴史にいかにかに寄与したか。文字がギリシア語である以上、当然ではあるが、クレタについてよりも遙かに多くのことが判然とした。そして旧説の変更に劣らず、いなそれ以上に、これまで全く未知だつた突に多くの事項が解明された。そしてこの場合、ホメロスが重要な補助史料となり、ホメロスの史料の価値はいちぢるしく増大したといえる。

まづミュケナイ人の文化程度であるが、従来はニルソンのいうように、文化は低く海上活動は海賊的であり、北欧のヴァイキングに比べられていた。^⑥しかしタブレットが示すごとくにクノッソス王宮の複雑で大規模な——後述のご

とくホメロスの宮廷よりも大規模で多様な——経済組織を継承して何の渋滞もなく運用し、又ミュケナイの私人の家が示すごとくに読書がある程度には行われ、その書法に幼稚でない程に習熟していた民族は、決してヴァイキングの類ではありえない。しかも他国の文字をもつて自国語を表わしえた民族であり、もし線状文字Bが十六世紀に本土において成立したのであれば（前述^⑩）、一層われわれはミュケナイ人の文化の高さを承認しなければならぬ。

そしてホメロスにあるミュケナイ人の強国ネストールのピュロスは考古学と言語学とによつて実に千七、八百年後に再認された。ピュロス・タブレットに記された地名の比定は困難であるが、リオン Rihon (Asine)、レウクトラ Lenktra (メッセニアとラコニアとの境)、ロンソイ I. Onsoi とエルコメノス Erchomenos (共に南アルカディア) などの地名があるところより、ピュロス王国は少くとも前十三世紀にはメッセニア地方をこえて、アルカディアの一部をも含んでいたことは確認してよい。^⑪ しかも発掘によつてその王宮は正しくミュケナイと匹敵する結構と規模とをまもっていたことが示された。^⑫

しかしこのタブレットが教えた最大のものは、エーレンバルクの言のごとくに、これまで全く空白であつたミュケナイの社会と経済との解明であつた。タブレットには *pa-si-to-n* (古典ギリシア語の *Bastileus* 王) *ra-wa-ke-ta* (*lavagetas*, *lagetas* 民の指導者) *wa-na-ka* (*wanax*, *anax* 諸侯また王) の語があるが、それらは王と諸侯(また地方的な王)を示すものであり、王をとりまく十六人ない二十人よりなる *ko-ro-i-ni* (*gerontai* 長老会) がある。これらおよび土地所有量などよりして、すでに王制より貴族制への推移を少くとも後期ミュケナイ時代には認めてよい。従来考えられていたよりも突に数百年以前にこの現象を見ることは注目に価する。^⑬ これら王国の土地制度——公有地、私有地、小作地——また奴隷などについてもホメロスに近い姿が認められるが、それらについては太田氏の論文に詳かに紹介されている。^⑭

しかしミュケナイ社会、経済については未だ議論の余地があり、比較言語学者なるパーマーの論文 *L. R. Palmer, Achaeans and Indo-Europeans* 1955. はミュケナイ社会はインド・ヨーロッパ人社会であるから、社会層、土地所有

形態その他に聞するタブレットの語と、ヒッタイト、インド・アリアン語、ゲルマン語のそれらと比較して、共通性を明かにしたものである。すなわち、神性とはいえ王権は弱くて王族のうちから選挙されること、土地に私有と共有とあること、王の下にバロンにあたる封建的武人と自由民（農民、工人）があることは共通であると、言語の比較から説く^⑥。しかしこのように社会の特質を人種に本来的なものとするか、否かは、容易に決定しがたい問題であるが、この比較は一応の解明に役立つであろう。

なおミネケナイ社会で注目されるのは、分業の意外の進化であり、それと関連する——タブレットの工人や農牧人は宮廷に關係するのであるから——宮廷財政は大規模であつた。戦車については前述したが、ヴェントリスは約百の職業名を列挙している。しかもそのうち約三分の一のみが古典時代に適合されうるといふ^⑦。また奴隸(ἄφροδι)〔男〕τοφελ〔女〕はあるいは「召使」と解す^⑧、きかは別としての数にしても、ホメロスでは諸侯の標準は約五十人（アルキヌス、オデュッセウス）であるのに対して、ピュロスでは六四五人の女奴隸——それと共に少女三七〇、小年二一〇

——また一五〇〇人の数が見られる^⑨。

社会・経済の面におとらず、ホメロスとの類似が明かになつたのは宗教についてであつた。約言すれば、当時は甚だ大胆な推論とされていたニルソンの見解 (M. Nilsson, *Geschichte d. gr. Religion. I. 1 Abschn. 1941*) が、正に適中したのである。ギリシアの神々の主要な殆んどが、ミネケナイ時代に生れていたのであつた。神名は供儀リストのタブレットに記されているが、ゼウス、ヘラ、アテネ、ポセイドン、アポロン、ヘファイストス、デメテルその他が認められる^⑩。より驚くべきは汎神 (Pantheism) の觀念が表わされていることと、既にディオオニュソスの名が——従来は前六、七世紀に北方トラキアまた小アジア方面から渡来したとされていた——クノッソスのタブレットに見られることである。この神は女性神デメテルと同じく農業者であり、混合神的性格をもつとエーレンベルクは説き、また供物に人身供御があつたことを注目している^⑪。同じくホメロスの英雄たちの名が、アキレウス、グラウコス、テセウス、ヘクトル、アイアスなど——タブレットに記されている。タブレットの性質上、これらの人名は当時の実在の凡

常な人物であつたかもしれないが、ミノスの名がみえないのは不思議である。しかしこれらの神や英雄の名を記したタブレットの内容については、まだ公にされていないから、ただわれわれは名の共通に驚くだけにとどまつている。しかし名は同じでも神の性質は時代と共に形成変貌してゆくものであるから、その形成過程をいかに辿るかが今後のギリシア宗教史の課題となるであろうし、それがギリシア宗教の研究にとつては最も重要である。

- ① V. Ehrenberg, *HZ* 1955, S. 1.
- ② *ibid.*, S. 13.
- ③ Chadwick, *The Earliest Greeks* (Manchester Guardian, June, 1954). Wace, *The Coming of the Greeks*, *Classical Weekly*, March 29, 1954. の訳は拓殖一雄訳、関西学院大学史学、第三号、一〇〇頁以下に所載)
- ④ これらについては前述したようにスニイデル、ウェースらによつて一応はギリシア的とされてきたが、フルマルクが陶器につづてのヘタ (*Mycenaean Pottery*) 以外には、不十分である。たとえば半ロゼッタ文様はより早い時期の壁面にも表われている。また宮殿式にしてもその文様がいかにクレタ的なのか、シユケナイ的に転用変化されているか、すなわち当時の美術一般を通じて、クノッソスに來たギリシア人がいかにクレタ美術を容したか、というその容過程を精密に辿らねばならぬ。

が、まだこの試みは十分になされていない。われわれはエヴァンソスの「ミノスの宮殿」第四卷(二二二頁)から再出発しなければならぬと思う。これらについての私見は他日を期したい。たとえばマツ (*A. Matz, Die Ägäis* 1950)。拙稿「エーゲ文明の近況について」史林一九五四、一號、六三頁、七〇頁参照。

- ⑤ M. Nilsson, *Das frühe Griechenland, von innen gesehen*, *Hist-oria* III (1955), S. 257.
- ⑥ アテナイ海上帝國の盛時に、キモンやアテナイの英雄にしてクレタのミンタウロスの征服者、テセウスの遺骨を持ち歸つた時(前四七五)、英雄を偉大にせんために、その相手國を粉飾誇張してこの「海上王國」がつくられ、それが「ロドトス、ツキロキイデス、プラトーン」によつて後に伝わつた。
- ⑦ また当然、クノッソスの離宮があつたケリリッソス、クノッソスの外港アマヒッソスその他。もとよりBの文字では Konoso, Raito, Turiso, Rukito (すなわち Iyktos) のごとくに表わされる。
- ⑧ Ventris-Chadwick, *Antiquity* 1953, p. 199. しかしそれら地名のあるタブレットの内容については、發表されていないから、私にはわからぬ。
- ⑨ Ehrenberg, *ibid.*, 6.
- ⑩ 三十頁参照。
- ⑪ M. Nilsson, *Homer and Mycenaean* 1933. 彼はシユケナイ時代を Greek Viking Age と題しても呼んだのであつた。

- ⑬ ミュケナイ世界における文字の弘布についてウヘーヌは強調しすぎている観があるが、ダウの如くに (Dow, *ibid.*, 109) それを Stated Literacy として小範圍とするのが、妥当であらう。ヘーレンブルクは (Ehrenberg, *ibid.*, 5) 支配層の多数と役人とが字を書きえたと考えるのは、行過ぎであり、支配者たちは世界の諸侯のごとくに文字を知らなかつたとも考えられるという。
- ⑭ これはフルマルクの説であるが、もつとも今日までのところでは本土で発見される線状文字はクノッソスのものより後の時代であるから、ミュケナイ人がクノッソスに侵入してきて、初めてミノア線状文字 A を採用して線状文字 B を作つたとの説も可能である。
- ⑮ Chadwick-Ventris, *Antiquity* 108, p. 199. Ehrenberg, *ibid.*, 5, 6. なきまじウトロス王が海軍を送じた Pleuron がペトラス港口にあるとすれば、アカイア地方にも勢力が及んでゐたであらう。
- ⑯ 前出のブレーゲンの諸報告。また最近でもその発掘は続けられし (The Palace of Nestor: Excavation of 1954, AJA 59, 1955 pp. 31-37.) 数年前に発掘された Megaron, Archiwe, Hall of State, Magazine, Northeastern Quarter のほか、Propylon をも発掘した。またメガロンその他の部屋から多くの壁画片と床の裝飾が発見されて、豪華の点におつてミュケナイ王宮に匹敵することが、実証された。
- ⑰ Ehrenberg, *ibid.*, 7. なお彼は王国の世襲について述べてゐる。
- ⑱ 大田論文「五四頁以下 Ehrenberg, *ibid.*, 8f. Palmer, Achaeans and Indo-Europeans, p. 6f.
- ⑲ このペーナーの小冊子は、一九五四年十一月四日、オックスフォード大学の講演。比較言語学の知識をもつてミュケナイ世界をより広い関連から明かにせんとしたものであるが、彼による *re-terra* はコッタイトの man of feudal service であつてヘーレンブルク (*ibid.*, 8) の Pichter oder Beamte (?) とは異なる解釈になる。
- ⑳ 職業名に ついては Ventris-Chadwick, JHS 1955 p. 87; 96f. また概念的には Ehrenberg, *ibid.*, 9f.
- ㉑ Webster, Homer and Mycenaean Tablets, *Antiq.*, 113, p. 13. Palmer, *ibid.*, p. 5.
- ㉒ Ventris, King Nestor's Four-Hampered Cups, *Archaeology*, Spring 1954, p. 20. 以下にあげた例は、何物を奉納したのかは不明であるが、「主な神」ナニ (A-the-nar-pot-ni-ja) と「職」神 (E-mu-wa-i-jo-i su-na-wa-ma-ni-si) と「治癒者」(Pa-ja-wo-[ne]) すなわちネロン (E-ne-ke-ya-ni) と (Po-sei-da-[o-ne]) と「」と總名 (Krossos Tablet V 52)。他の神に ついては例をば di-we-i (to Zeus) 上例は三格であるが、一格では e-ra (Hera), a-ta-na-po-to-ni-ja, po-sei-da-o, pa-ja-wo となる。なお Elicthyra, Erinyes 等の神名も見られる。
- ㉓ 宗教に ついてはヘーレンブルク上掲論文、十一頁以下に注目すべき意見をのべてゐる。また Webster, *ibid.*, p. 11f. 彼がネロメの英雄名はミュケナイ時代の実在人であらうと (*ibid.*

129)。ピュロス・タブレットによると、アキレウスは小額の穀物の受取者であり、ヘクトールは平和に小地を賃借している。

(Palmer, *ibid.*, 4)

② Ehrenberg, *ibid.*, 12.

五

これまでに述べたごとくに、文字の解読にもその時代の歴史の解明にも、ホメロスが重要な役目をなしたのであるから、ここに線状文字Bのタブレットとホメロスとの関係が研究の対照になるのは当然であつた。そしてホメロスが史料として一層価値を増大してきた。しかしホメロスの詩そのものとタブレットとの関係、すなわちホメロスの原形が果してタブレットに期待されるかについては、困難であろうし、またその他については太田氏論文にふれてある。

しかしウェプスターの論文 T. B. L. Webster, *Homer and the Mycenaean Tablets*, (*Antiquity* 113, 1955, p. 11 f.)

は多少間接的ではあるが、両者の関係を論じたものである。

この論文は広い面について——社会、宗教をもふくみ——タブレットとホメロスとを比較し異同をのべた好論文であるが、そのなかに彼は両者の詩形 *diaphic*、*paroeniac*、*シ*

ンタックスの類似、奉納物のリストや動物のリストにおける品物の順序の類似などからして、タブレットの書記はミネケナイ時代の歌手であり、詩人であつたであろう。

ともかくその時代において詩人がタブレットに影響し、タブレットが詩人に影響したであろうとは、ある程度信じてよい。そしてピュロスから多数のタブレットが発見されたが、そこからアテナイを通過してイオニア——コロポオン、スミルナ——に伝わつた。それがホメロスであるといふ。

ウェプスターはホメロスにおよぼしたイオニアの影響の過大視とアテナイの影響の過小視とを指摘しているのであるが、彼は原幾何学様式時代および幾何学様式時代におけるアテナイ文化の高さを念頭においているのである。すなわち、考古学上からアテナイにおいてはミネケナイ時代から幾何学様式への推移が切断なしに——文化上、民族上——漸次になされたことが、実証されていた。ドイツの諸学者によるケラメイコスの発掘の結果がそれを示した。しかしこのことはドリア人の侵入をまぬがれたアッティカに限るものであつて、他の地方においてはドリア人の侵入に

よつてミュケナイ文化は全く壊滅し、暗黒のうちから除々に幾何学様式時代が萌してくる、と考えられていたのであつた。しかるに今や、ピュロスのタブレットが、またクノッソスのタブレットが示すところによると、その社会、経済、宗教においてホメロスと同一基調であり、大差のないことが明白になつた。アテナイの例は例外ではなく、ギリシア一般に通じる現象であつた。ここにおいて、これまでギリシア史の真の出発と考えられていた、「ドリア人の侵入」はもちろん無視しえないけれども、その意義は低減し、それだけに、ミュケナイ時代がギリシア史の前史というよりも、その初期の歴史に深く組込まれることになつたのである。タブレットとホメロスと考古学の成果とを利用して、どのように前十五、六世紀からはじまるギリシア史の最初の章が書かれるかは、今後の数年間にさえ課題となるであらうか。現在の段階ではまだ個々の事象の比定や立証に止つてゐるから。

また言語学的な研究は当然にBの言語とギリシア方言との関係およびひいてはギリシアの種族の侵入の前後や方向の問題にもおよんでくる。さきのパーマーの研究もその一

つてあるが、*イサニ*の論文 V. Pisani, *Die Entzifferung der Ägäischen Linear B Schrift und die Griechischen Dialekte* (Rheinisches Museum für Philologie 28-1, 1955.) はその代表であらう。彼は言語学的にミュケナイ語がアッティカ方言やアルカディテ \llcorner キエプロス方言と共通することを証明して、それはアイオリス方言以前にペロポネソスにあつた。ミュケナイ語は古イオニア方言と同一言語の二分派であり、それは小アジア西海岸から島々をへて本土の南東海岸とペロポネソスの内地に広がつた。これら言語をもつ彼らはキエプロスと小アジア海岸の一部を故郷とし、そこで既に特殊な言語地域を形成していた。彼らこそアッキアヴァであり、ヒッタイト、ルヴィア、パライ、およびリュキアや、リュディア語と関係があるという。そして他の方言についても、アイオリス方言はトラキア、マケドニア方面より来たのであり、かような結果としてホメロスの混成語が説明されている。言語研究の正否は判定しがたいから、私にはただここに大意を記して、将来の類似の説を待つ他にない。

以上、ミノア文字の解読の成果の概要にふれた。解読後まだ僅かに二、三年にしてかくも絢爛たる花が次々に咲きみだれた。タブレットの発見以来、五十余年間にわたつて鬱積していた探究精力は、ここに一斉に壑をきつて流れだしたのである。本年度の一カ年のあいだにはさらに、また次の一カ年はより多くの解釈と新説とが相次いで提出されるであらう。また資料も発見される可能性は十分にある。そして新しいエーゲ世界の姿が次々に現わされるであらうし、またミュケナイ時代とアルカイック時代を結ぶホメロスの史実としての研究は一層盛んになるであらう。のみならず、私もエーレンベルクとともに線状文字Aおよび絵文字の解読の日も遠からぬことを期待するのである。何とな

れば、BのなかにはAの言語もふくまれてゐるし、研究の分野は広い視野の下に行われてゐるからである。

本稿の執筆については東大考古学教室の多くの資料を使い、また関西学院大学粟野頼之祐教授、京都大学松平千秋助教授から教示をえたことを感謝の念をもつて付記する。

① 太田論文、五二頁以下。

② Webster, *ibid.*, p. 13f.

③ ケラメイコスの発掘は古くは問はず、少くとも一九二七年より一九四〇年にわたつて行われ、その成果は Kerameikos 3, *Ide.* 簡單には G. Karo, *An Attic Cemetery. Excavations in the Kerameikos at Athens under Gustav Oberlander and the Oberlander Trust 1943.*

追記、校正中に高津春繁「ミノア文字Bの解読」(西洋古典学研究IV)が出たが、それは邦文中にては最も言語学的な文献である。

Before and After the Decipherment
of a Minoan Script

by

Kazunosuke Murata

One of the three kinds of the Minoan script, that is, the Linear B has been deciphered by M. Ventris. Of course, there is a long history as the background for this final success. It was the excavations and studies of A. Wase, C. W. Blegen, A. Furumark and others which undermined the traditional view on the script. It was by A. Kober, E. Bennett and others that the characteristics of the Linear scripts were more fully revealed and the Linear B was proved to be Greek in essence. Without the struggles of these scholars and the complete publications of sources, Ventris's achievement would not have been possible.

This decipherment, on the other hand, has resulted in unexpectedly great changes in terms of Aegean history. Now the re-writings are needed concerning the L. M. II, the Kingdom of Nestor, the society and religion of Mycenaean Ages, and the early period of Greek history. Here the author has introduced articles of various scholars on these periods and criticized them.

Jori (条里) of Yamashiro (山城)
and Heiankyo (平安京)

by

Jiro Yonekura

This essay intends to investigate the city plan of Heiankyo (平安京) on the basis of Jori (条里). The reproduction of Jori of both Otagi-gun (愛宕郡) and Kii-gun (紀伊郡) has shown that the border line between them was running east to west across